

報告

Neuro Alex 2023 に参加して

江面正幸

国立病院機構仙台医療センター 脳神経外科

(2023 年 10 月 18 日受稿、2023 年 10 月 18 日受理、連絡先：江面正幸・仙台医療センター 脳神経外科)

今回「仙台医療センター海外学会等旅費支給制度」を利用して、エジプトのアレクサンドリアで開催された「Neuro Alex 2023」に参加した。本報ではまず院長としてこの制度を解説し、制度変更後の最初の利用者として、参加報告を記す。

海外学会等旅費支給制度について

海外学会参加に旅費を支給する制度はずっと以前からあったが、制度自体に名称はなく「海外で開催される学会・研修会への参加希望者の募集」というような形式をとっていた。また旅費を支給されても、もらえばなしで報告義務がなかった。そこで制度の改訂を検討していたところ、ちょうどコロナ禍で海外出張が極めてしにくい状況となり、近年は募集自体を停止していた。2023 年 5 月から新型コロナウイルスが 5 類扱いに変更されることをうけ、2023 年の上期から募集が再開された。この際募集時期を少し早める、支給を受けた場合は仙台医療センター医学雑誌に記事を投稿するなどの制度変更が行われた。これまでこの制度に名称がなかったが、この報告記を記載するにあたり、制度に名称がないと報告記を書きにくいので帰国後の幹部会議にて「仙台医療センター海外学会等旅費支給制度」という名称をつけた。

応募に際しては、院長自らが応募して良いの？とも思ったが、逆に院長だからといって特別な海外渡航費が確保されているわけでもなく、学会への渡航費用を病院に請求するなら他の職員と同じ枠で応募していただきたいと事務から言われそのようにし

た。今回は募集再開後すぐだったこともあり、私の応募 1 件だけだったので、私が旅費支給の恩恵にあずかった。

エジプトとの関わり

おそらく 1998 年だったと思うが一人のエジプト人青年が東北大学の脳血管内治療の教室（神経病態制御学分野）に大学院生として入門した。これが Tamer Hassan である。脳血管内治療が急速に発展しはじめる時期で、私は恩師の高橋明先生と広南病院で脳血管内治療をやっていたが、その高橋先生が 1997 年に東北大学脳神経外科に異動し翌年に開いた大学院講座が上述の神経病態制御学分野である。Tamer は大学院に入ったので学位を取ることが最大の目標だったが、脳血管内治療の臨床にも深く興味を持っており、学位と並行して脳血管内治療の臨床の研修も希望したので、それについては広南病院で私が面倒をみることになった。Tamer はとても優秀で、学位論文を書く前から臨床面の論文を数多く書いてくれた¹⁻³⁾。私は 2003 年に神経病態制御学分野に異動するのだが、創成期の本教室の論文は殆どが Tamer の手によるものである。脳神経外科で最も権威がある雑誌は、Journal of Neurosurgery であるが、その雑誌の 2005 年 10 月号の表紙写真として Tamer の論文の Figure が採用されたのは教室を挙げての慶事であった⁴⁾。

Tamer は大学院生時代に結婚したのだが、出身地のアレクサンドリアで行われた結婚式には私も参加した。その際にエジプトの男性はみんな大きいこ

とがわかった。Tamer は体重が 130 キロくらいあると思うが他にお会いする方もみんな大柄だった。ラシュワンがたくさんいるみたいだった。その後 Tamer に招かれ、3 度ほどアレクサンドリアを訪問している。結婚式に参加した際はカイロに着いてそこで彼の友人に市内観光の案内などしてもらったので、この際にツタンカーメンやピラミッドをみたが、そのあとは全てアレクサンドリアにしか行っていない。アレクサンドリアはナイル川が地中海に注ぐ河口に開けたエジプト第 2 の都市で、「地中海の真珠」といわれる美しい港町である。アレクサンドリアの行き方はオーソドックスにはカイロから入る。ただこの方法の一番の難点は日本からのカイロ便は全てエジプト航空であることである。エジプト航空はスターアライアンスなのでラウンジ使用などは問題ないが、機内でのアルコール提供がない。つまり成田を出発したらカイロまでアルコール無しで 12 時間くらいを過ごさなければならないのである。そこで 2012 年に招かれたときはどうやってカイロまで行こうか考えて、酒類提供可能なトルコ航空を利用し、イスタンブール乗継ぎでカイロに向かった。この際イスタンブールに 2 泊し観光をした。カイロからは国内線使用でアレクサンドリアである。

2014 年に再度招かれたが、その際にはイスタンブールアレクサンドリアの便が開設されていて、これを使うことにした。イスタンブールからは東欧の各所にフライトがあるので、イスタンブールで乗継いでソフィアに向いソフィアで 2 泊のブルガリア観光、ソフィアからイスタンブール乗継ぎでアレクサンドリアに向かった。帰路はアレクサンドリアからイスタンブール乗継ぎで成田である。4 度目は 2017 年だったが、上記のソフィアをブカレストに換えてルーマニア観光をした。この先も東欧 1 ヶ所＋アレクサンドリアを楽しもうと思っていたら、コロナ禍になって海外自体のハードルが高くなった。

2014 年に訪問した際は Sherif Mohamed Rashad という青年を紹介され、日本で勉強したがっているというので、帰国後東北大学にその旨を伝え、受け入れていただいた。Sherif は今も東北大学に助教として在籍している。前回の 2017 年には、当院で

研修したいという Karim Gaber を紹介された。もちろん見学するだけなら大きな問題はないがエコノミカルなことも相談され、給料は要らないがアパートは何かならないかとのことで、では帰ってから検討してみるということにした。旧病院にゲストが泊まれる部屋があってエジプトからモヤモヤ病の手術を受けに来た家族を泊まらせていたりしたので、その部屋を事務と交渉し、確か 1 泊 1000 円くらいだったと思ったがその分は脳外科の医局費で負担することにして、受け入れ可能と返事した。彼は結局 2018 年に 3 ヶ月ほど滞在し、論文を 1 本書いてくれた⁵⁾。

エジプトの招待ルール

1 回目は結婚式の参加なので状況が違うものの、あとの 3 回は Tamer からの講演の依頼を受けて私が訪問した形なのだが、初回を含め 4 回とも「エジプトまで来てくれればそこから先の旅費・宿泊費はこっちで持つ」というものだった。つまり、「エジプトまでは自分で来てね。旅費は持たないよ」ということである。まあその分、ソフィアやブカレストに自由に寄れる、というメリットもあった。コロナ禍の間も「そろそろまた来てね」という依頼はあったがもちろん行ける訳もなく、そんな中で昨年暮れに再度依頼があった。どうしよう今回は迷っていたところ、5 月から新型コロナウイルスの扱いが変わるということにもなり、2019 年の秋以来全く海外に行けていないこともあって、今回はオファーを受けることにした。旅費のルールは上に記したとおりである。招待講演であっても変わらない。先方は妻との同行をリクエストしてくれて、妻は仙台で何度も Tamer に会っているし、我が家の個人的な事情として 4 月から一番下の娘が大学に進学でき、受験生が家に居なくなって 1 週間程度家を留守にしても良い状況になったので、久々の妻との海外渡航ということにした。ただ、コロナで海外旅行控えになっている間に、航空運賃は飛んでもなく上昇しており、コロナ前ならイスタンブール経由の成田アレクサンドリア往復が 15 万円くらいで行けたのに、今は 30 万円以上かかる。もちろんエコノミークラスの話である。海外学会等旅費支給制度の支給上限

額はアジア以外では 35 万円であるが、今回の場合は東京ーアレクサンドリアの航空券 (32 万円) に加え、仙台ー東京往復、イスタンブールの前泊分でこの 35 万円はすっかり使いきった。

病院から学会場まで

行くと決めた時点でトルコ航空のサイトに行ってみると、東京ーイスタンブール往復と、イスタンブールーアレクサンドリア往復の 2 種類の組み合わせをかう形であった。何で東京と書いているかという、トルコ航空は羽田と成田とどっちも飛ばしていて、行きと帰りで違っていても良い。それでカレンダーとにらめっこして、行きは羽田ーイスタンブールを選んだ。というのも、成田発は午前だが羽田発は夜なので、羽田発ならその日の午前は病院業務をできるのである。羽田発がイスタンブールに着くと 1 時間 35 分後にアレクサンドリア行きがイスタンブールを出るという設定なので、乗継便としてはスムーズである。ただあまりにも時間が接近しているため、何かトラブルがあると乗り逃す心配がある。その上イスタンブールーアレクサンドリアは日に何便もあるどころか週に 3 便しかないの、これを乗り逃すとそもそも学会に間に合わない。それでイスタンブールで 1 泊することにした。帰りは逆に、イスタンブールでのスムーズな乗継ぎを考えて、成田着にした。アレクサンドリア発 0950 イスタンブール着 1210、イスタンブール発 1550 成田着 0850 で、この行程なら料理の評価の高いイスタンブール空港のラウンジに 3 時間くらいは居られてちょうどよかったのだが、時刻変更があってアレクサンドリア発の便が 0340 発 (0555 着) になった。ラウンジの滞在が長くなったのはよしとしても^{注1)}、朝 0340 のフライトは結構きつかった。

そういうわけで、結果的に 25 時間のフリータイムができたので、イスタンブールで観光をすることにした。イスタンブール観光は私は 2 回目になるが、妻は初めてである。我々の世代にとっては「飛んでイスタンブール」であり、イスタンブールに居て観光しないわけにはいかないし、2 回目だからといって観光に飽きることもない。

9 月 19 日午後病院を出発し羽田空港に向かっ

た。当院では月曜の朝 8 時 30 分から幹部会議を毎週行う。月曜が休日であれば火曜になる。この日は連休明けの火曜日で、幹部会議があった。この会議は最重要なので、これに出席することを前提にしてこの便の選択となった。コロナ禍でも国内は割りと飛行機に乗っていたが、海外は久々で、2019 年 11 月のナポリ以来なので、ほぼ 4 年ぶりである。私は ANA のプラチナ会員のため会員用ラウンジを使用できるが、国際線のそれは国内線のものより数段サービスが良い。なので、国際線に乗る際はスターアライアンスを選ぶことになるし、国際線搭乗前は必ずラウンジに寄る時間を作っている。

久々の国際線ラウンジを味わい、2155 羽田発。イスタンブール着は 20 日の 0515。こんなに早く着いてどうするの? と思うかもしれないが、魚心あれば水心、そういう需要に応えるツアーがあるのだ。6 時 45 分空港発、最初にホテルまで行って荷物を預け、そこからは徒歩移動。まず朝食に連れられ、そのあとブルーモスク (図 1)、アヤソフィア、グランドバザール、エジプシャンバザールなどを回ってドネルケバブのランチを摂って解散となった。

9 月 21 日、3 時起床、4 時ホテル発でイスタンブール空港を 0650 発。アレクサンドリア空港に 0900 到着。迎えの車が用意されていて、ここから高速道路を 100 キロひた走る。確か以前は高速道路ではなかったので開発が進んでいるのであろう。10 時 30 分にホテル到着。



図 1: イスタンブールのブルーモスク。正式名は、スルタンアフメト・ジャーミイ。

Neuro Alex 2023

これが本来の今回の目的である。この学会に呼ばれるのはこれが3回目である。アレクサンドリアは地中海沿いの港湾都市と紹介したが、その西側にアラメインというリゾート地があり、Neuro Alexは例年そのリゾートホテルで行うならわしのようだ。場所がきまっているだけで、使用するホテルはその都度異なる。Neuro Tokyoを熱海で行って使うホテルはその都度違う、みたいなイメージだ。ただアレクサンドリア市内とアラメインは140キロほど離れている。そしてアレクサンドリア市内からアラメインに向かう道筋にアレクサンドリア空港がある。市内から空港までは40キロくらい、なので空港からアラメインが100キロくらいだ。この位置関係も東京、羽田空港、熱海に似ている。

学会の受付に行くと、学会は午後2時からだが

午後6時からのオープニングセレモニーに出てくれば良いとのこと。なので、ランチをとってから午後はホテル内でゆっくりした。

4時30分頃学会会場に行く。会場は仙台医療センターの大講堂の倍くらいの広さ、そこに150人分くらいの席が用意されている(図2)。オープニングセレモニーでは、ゲストの一人一人が名前を呼ばれて壇上で記念の盾を渡された(図3)。なんだかとても偉い先生になった気分だった。

翌9月22日には、発表が2題課せられている。いずれも学会クロージングの前のシンポジウムであり、日中のデューティーはない。なので、遅めの朝食を摂りビーチ散歩などをした。実はこのホテル、周囲に観光地とかアクティビティがあるわけではない。ひたすらホテルでのんびりするしかない。

私の発表は、「Staged angioplasty in Sendai Medical



図2：会場はホテルのロビー階。



図4：筆者の1題目の発表。



図3：ホテルの部屋からの眺めを背景にして、いただいた盾の写真を撮る。この青い海が地中海である。



図5：終了後参加者たちと記念撮影。Neptune Hallと書かれたところを入って行くと図2のようになる。真ん中の黄色い服がTamer Hassan。黄色い服なのは、ベガルタ仙台へのオマージュらしい(彼は私が熱烈なベガサボなのを知っている)。

Center」(図4,5)と「Optimal strategy for mechanical thrombectomy based on preoperative imaging diagnosis of thrombus composition」。前者は既に私が論文化しており⁵⁾、後者は現在は異動した坂田洋之先生が論文化している最中である。自分の仕事で英文論文を完成させ、その内容で招待講演を行える、これは研究者冥利につきる、というものである。私は既に学術論文を執筆するような状況にはないが、今回のこの招待講演は当院の若手・中堅医師の範となるのではないか。今回の渡航は、海外学会等旅費支給制度で旅費はカバーされている(エジプトでの滞在費、学会参加費が免除されていた面はあるが)。イスタンブール観光が不十分でもエコノミークラスの席が身動きが取れなくても、学会の空き時間のリゾート体験は十分満喫できる。この制度の希望者が殺到して選考に苦慮するようなきっかけにこの報告記がなればと願っている。

学会終了後

9月23日。これまでの3回は会場のホテルに2泊、終了翌朝にアレクサンドリア市内に移動し、市内観光や病院見学、Tamer 宅でのディナーなどをさせてもらって市内泊、となっていたので、今回もそうなるものと思っていたが、終了翌日も引き続き同じホテルに滞在となっていた。Tamer が妻と水入らずの1日をと、気を利かせてくれたのであろう。ただそうすると、ホテルから直接帰路に向かうことになり、妻の初めてのエジプトは、同じホテルに3泊したのみ、ということになる。以前何度目かの沖縄旅行のとき、那覇空港から糸満のリゾートホテルに向いそこで3泊してそこから一度も出ずにそのまま帰って来たことがあったが、それに近い。でもその際は国際通りも行き飽きたし、という枕詞が着いたのだが今回はそれはない。でも妻は、もともといろいろな動き回るのが好きでなく、出先ではゆっくりしていたい方だし、出発前に腰を痛めたこともあり、これはこれで楽しめたようである。貧乏性には理解できない、なんとも贅沢なエジプト旅行である。

今回のホテルは Regal Heights Alamein という5つ星ホテル、外観はシンガポールのマリーナベイサンズに似ている(図6)。確かに高級感がある。で



図6：Neuro Alex 2023 のポスター。左下が会場となったホテルの外観。ホテルのマークが国立病院機構のマークに似ている。

も何かが足りない。そう、アルコールである。最初にエジプトに来たのは Tamer の結婚式だったがもちろんそういう宴席でもアルコールは出ない。アルコール抜きのカクテルみたいなので乾杯などしている。ウェディングパーティーは日本のそれよりフランクでディスコみたいに踊り狂っていたけれど、全員が全てしらふとはとても思えないくらいのノリだった。エジプトの男性が大きいことは既に記載したが、彼らは酒を飲む代わりにひたすら食べているのだらうと、そのとき考えた。私はもともと小食で、かつ大酒家だからどう転んでもエジプト男性にはなれない。なれないので、最近出た炭酸で薄めて飲むビール飲料と、ペットボトル入りのワインをスーツケースの中に忍ばせていた。それらと炭酸水、持ってきたおつまみをビーチサイドに持参、リゾート気分をアルコールつきで存分に満喫した^{注2)}。この日はホテル滞在の最終日であったが、帰りのフライトが上述のように0340だったため、午後11時30分にチェックアウトして帰路についた。

海外旅行の意味ってなんだろう。月並みだけどそれは異文化体験だろう。異文化ということであろうとイスラム教は圧倒的に異文化である。今回訪れたトルコもエジプトもイスラム教国である(トルコでは街中でお酒を飲んでいる人が結構いるので、クリスチャンも意外と多いのかと思ったら国民の99%がムスリムであり、つまり敬虔度の違いのようだ)。適度な飲酒さえも禁止するのにたばこはプカプカ、ビュッフェではてんこ盛りの過食、非生理的なラマ

ダン。宗教と医学ってどういう関係にあるんだろう？回答は、海外学会等旅費支給制度を利用して海外で研修する後進に委ねたい。

注 1) エジプトのホテルはどこもお土産店さんがなく（たぶんお土産という文化がないのだと思う）、空港も午前 3 時でも売店は開いてはいいたがリンツのチョコとかピラミッドの置物しかなく、お土産選びもイスタンブールでのトランジット中となった。観光とお土産がイスタンブールなので、イスタンブールに行ったのかエジプトに行ったのかよくわからない。

注 2) 到着後わかったことだが、このホテルではアルコール提供のあるレストランもあった。ただ飲食代が向こう持ちの場合は食事ときにアルコールは注文しにくい。Tamer のような敬虔なムスリムはアルコールを飲むことはもちろんのこと提供することも厭う。なのでその場合は食事つき団体ツアーのようにアルコール代だけ自分で払うことになり、勘定時に無粋な光景を展開することになる。折角ごちそうになってそれは興ざめなので、食事ときにはアルコールが欲しくてたまらなくても控えることになる。

文献

- 1) Hassan T, Timofeev EV, Ezura M, et al. Hemodynamic analysis of an adult vein of Galen aneurysm malformation by use of 3D image-based computational fluid dynamics. *AJNR Am J Neuroradiol* 24, 1075-1082, 2003
- 2) Hassan T, Ezura M, Takahashi A. Treatment of giant fusiform aneurysms of the basilar trunk with intra-aneurysmal and basilar artery coil embolization. *Surg Neurol* 62, 455-462, 2004
- 3) Hassan T, Ezura M, Timofeev EV, et al. Computational simulation of therapeutic parent artery occlusion to treat giant vertebrobasilar aneurysm. *AJNR Am J Neuroradiol* 25, 63-68, 2004
- 4) Hassan T, Timofeev EV, Saito T, et al. A proposed parent vessel geometry-based categorization of saccular intracranial aneurysms: computational flow dynamics analysis of the risk factors for lesion rupture. *J Neurosurg* 103, 662-680, 2005
- 5) Gaber K, Ezura M, Narisawa A, et al.: Enlargement of asymptomatic VA dissecting aneurysm after initial treatment with stent-assisted coil embolization with contra lateral ruptured VA dissecting aneurysm treated by parent artery occlusion: A case report. *JNET* 13, 262-267, 2019
- 6) Ezura M, Kimura N, Sakata H, et al.: Carotid artery stenting using balloon-expandable coronary stent: Intentional use for staged angioplasty. *JNET* 15, 621-628, 2021